

吳趼人の歴史小説について（上）

中 島 利 郎

Wu Jian ren : His historical novel

Toshio Nakajima

摘 要

清末小説作家吳趼人一輩写了三篇歴史小説：「痛史」「兩晋演義」和「雲南野乘」。這些小説都是在清末出版的小説雜誌上發表。但是，這些小説都是未完成作品。為什麼他没能写真完，而且那个原因在哪里？吳趼人的這些小説有什麼思想？下面擬就這兩個問題談我的淺見。

關鍵詞：吳趼人，清末小説

1992年9月30日

1. 三篇の歴史小説

清末の作家吳趼人（同治5～宣統2〈1886-1910〉）は、生前数多くの作品を發表したが、その中に以下のような三篇の「歴史小説」がある^①。

1. 「痛史」（『新小説』第八号〈光緒二十九年八月十五日〉～第二十四号〈発行年月日不記〉に筆名「我仏山人」で断続的に掲載，二十七回，未完。）
2. 「兩晋演義」（『月月小説』第一号〈光緒三十二年九月十五日〉～第十号〈同三十三年十月〉に筆名「我仏山人」で連載。二十三回，未完。）
3. 「雲南野乘」（『月月小説』第十一号〈光緒三十三年十一月〉～第十四号〈同三十四年二月〉に筆名「趼」で断続連載。三回，未完。）^②

「痛史」は、蒙古軍の侵攻による南宋の滅亡を描いた小説で、梁啓超の主宰する清朝末期の最初の本格的な小説雑誌『新小説』第八号より連載が始まった。『新小説』第八号は小説家吳趼人にとっては記念的な雑誌で、この号から「痛史」とともに彼の代表作「二十年目睹之怪現狀」の連載も始まっており、吳趼人が小説家として地歩を築いた雑誌といえる。

「兩晋演義」は、その題の示す通り三国魏の後を受けた西晋および東晋の興亡を描こうとしたが、中絶した。掲載誌の『月月小説』は光緒三十二年九月、安徽省休寧の汪惟父が発刊

した小説専門の雑誌で、『新小説』掲載の小説で文名の揚がった吳趼人は総撰述（知新室主人の室名をもって名高かった周桂笙が総訳述）として招請され、後には編集者も兼ねた。『新小説』停刊以降、吳趼人の作品は主にこの雑誌に掲載されることになる^③。

「雲南野乘」も『月月小説』に掲載された。戦国時代末期以降清末に至るまでの雲南の歴史を描こうと意図したものらしい、ただ三回のみ、戦国楚の莊躋が雲南に至り、滇国の王となるまでが発表されただけで、その後ストーリーの展開はまったくつかめない。

さて、これら三篇の歴史小説は、以上に揚げた各誌の掲載状況からも解るように、ともに未完に終わっている。

吳趼人の小説は、雑誌や新聞への発表を経た後に、その多くが単行本として刊行された。清末期の雑誌や新聞は、数年で廃刊になるものが多く、当然連載小説などは中途未完で終わってしまうものも多かった。吳趼人の小説にもそのような作品がある。たとえば、「痛史」と同時期に『新小説』に連載が開始された「二十年目睹之怪現狀」は、『新小説』が第二十四号で停刊になると同時にもちろん連載も第四十五回で中絶してしまった。しかし、その後「二十年目睹之怪現狀」は、上海の広智書局から単行本として順次出版され（第一冊の出版は光緒三十二年二月十八日）、吳趼人の死後二ヶ月を経た宣統二年十二月に全八冊が出て、物語は全百八回で完結した。また、吳趼人が「老少年」という筆名を使用して『南方報』に光緒三十一年八月二十一日から同年十一月二十九日まで連載した「社会小説 新石頭記」も第十回までが掲載されただけで未完に終わったが、光緒三十四年十月、上海改良小説社から「四卷八冊、全四十回、毎回附絵図」^④として完結刊行されている。もちろん上記の歴史小説三篇以外にも、吳趼人が雑誌類に連載した小説で完結しなかった作品はある。その死によって杜絶した「奇情小説 情變」を除けば、「糊塗世界」（初出『世界繁華報』）、「最近社会齷齪史」（初出『中外日報』）と「法律小説 剖心記」（初出『競立社小説月報』）の三作がそうであったと思われる^⑤。それぞれ未完に終わった経緯は不明であるが、歴史小説が三篇ともども未完に終わったのは些か理由が異なると思われる。

では、以上の三篇の歴史小説は何故杜絶したまま、書き継がれることもなく終わってしまったのであろうか。

「痛史」が未完に終わった理由を、楊世驥は「因為『新小説』的停刊，此書遂未續刊」と、『新小説』の停刊にあると述べているが^⑥、前述したように「二十年目睹之怪現狀」は、後に単行本として完結しているのであるから、必ずしも妥当な理由とはいえない。

また「兩晋演義」についていえば、『月月小説』第七号掲載の「兩晋演義」終了の次頁に以下のような記事があり、この小説がかなりの長編になることを示している。

兩晋演義隨撰隨刊本未分卷，茲以此書卷帙過繁，若終不分卷則書縫碼一氣蟬聯不便裝訂，特分第一回至此為第一卷，自第二十一回起以每二十回為一卷，以便閱者將來拆訂伏維 鑒

之

上記の引用について些か説明を加えておこう。当時発行された小説雑誌類には、ノンブル（頁付け）が一頁に二通りついているものが多かった。一つは現在と同様にその雑誌の通しのノンブルである。もう一つはその雑誌にある一定の期間に渡って連載される小説専用につけられるノンブルである。つまり、ある小説の連載が開始されると、その小説の最初の一頁目には通頁ノンブルとは別にその連載小説のためだけのノンブルが設定されるのである。たとえば「兩晋演義」に例にとると、その連載開始第一回のノンブルは、『月月小説』第一号の通頁としては十五頁から始まるが、別に通頁ノンブルの上にこの小説だけの専用のノンブルも記されており、それは第一頁となっている。『月月小説』第一号の「兩晋演義」の掲載は第二回までで、第二回終了の雑誌の通頁ノンブルは二十九頁であるが、専用ノンブルは十五頁となっており、小説の掲載も十五頁の途中で終わっている。次の頁十六頁（通頁三十頁）は補白である。なぜ十六頁が補白になっているのかといえば、掲載の連載小説は各号ごとに必ず奇数頁から始まり偶数頁で終わっているのが常であり、奇数頁で終わってしまった場合には偶数頁を補白として利用するためである（実は上記の引用もその補白を利用してのことわり書きなのである）。そして十七頁はなく、新たに上海知新室主人訳術「虚無党小説 八宝匣」という連載物が専用頁一頁から始まる。もちろん通頁は三十一頁である。そして『月月小説』第二号掲載の「兩晋演義」第三回は専用ノンブル十七頁から始まり、前号掲載のノンブル十六頁とつながるように工夫してある。このようにしておけば、それぞれの小説の連載が終了した後、掲載誌から特定の小説をとりはずして一冊に製本するのに便利だからである。しかし、長期連載小説の場合、連載が終って一冊に製本するとあまりにもぶ厚くなって不便であるし、また長時間を経ると雑誌そのものが紛失することも考えられる。

上記に引用の記事は、そのような読者のための便を考慮して、第一回より『月月小説』第七号掲載の第二十回までを一巻とし、以降二十回毎を一巻とするので、それを目安に読者は雑誌より「兩晋演義」を切り離し製本装丁して欲しいと述べているのである。

そして、『月月小説』第七号に第二十回まで連載した時点で、このような記事が出たことからするならば、「兩晋演義」はかなりの長編小説になる予定であったことがわかる。ところが、この記事に掲載した次の号、つまり『月月小説』第八号より、創刊号から毎号二～四回分づつ掲載されていた「兩晋演義」が一回分より掲載されなくなり、遂には『月月小説』第十号で連載が打切りになるのである（『月月小説』は二十四号まで発行され停刊）。

では、なぜ打切りになったのか。『月月小説』第十号〈光緒三十三年(1907)十月〉掲載の春颿著「立憲小説 未来社会」第一回の前に挟みこまれた広告に^⑦、再び次のようなことわりの記事が載っている。

注意 本雑誌所載兩晋演義一書，係随撰随刊，全書計百回以外，每期祇一二回，徒使閱者厭倦，若多載數回又以限於篇幅，徒占他種小説地歩，同人再三商訂，於本期之後，不復刊載，当由撰者聚精会神大加修飾從速統撰，俟全書殺青後，再另出單行本，就正海内惟 閱者鑒之

この記事は前述した「兩晋演義」はかなりの長編になる予定だったことを、はっきりと裏付けている。百回以上の長編になる予定だったのである。しかし、またこの記事は先に引用したことわり書きと明らかに矛盾もしている。なぜならば、先の引用では読者の製本装丁の便をはかってわざわざ、二十回を以て一卷とすると述べているのに対して、この記事では、全体が百回以上に及ぶので毎号一・二回の掲載では読者が飽きてしまうし、もし今まで以上の回数を掲載するとなれば紙幅に限りがあり、他の小説の篇幅を奪ってしまうので、本号で連載を中止する。作者には専念して続作してもらい完成の暁には、単行本として刊行する、というのである。『月月小説』が定期刊行の雑誌である限り、読者の興味が次号はつながるような連載は、読者が飽きてしまうという理由で掲載を中止することはないはずである。よほど評判が悪くない限り、連載の中止は雑誌の経営において不利益を免れない。『新小説』に連載された吳趸人の「二十年目睹之怪現狀」は第四十五回まで該誌に発表されたが、該誌停刊の後書き継がれて単行本となり完結したことは、雑誌連載後に単行本化して更に利潤をあげるといふ現代の出版業のセオリーと一致した経営のあり方であって、その小説が好評な限りは突如雑誌連載を中止することなどありえないはずである。

では、「兩晋演義」はなぜ連載が中止になったのだろうか。明確な理由は現在のところ不明である。しかし、推測は可能であり、二つの理由が考えられる。その一つについてはすでに論じたことがあるので、いまここでは簡単に述べるにとどめておく。

汪惟父が『月月小説』を発行するにあたって、吳趸人を総撰述に、周桂笙を総訳述に招聘したことはすでに述べた。そして、吳趸人は第四号からは編輯者にもなっている。『月月小説』は第一号から第三号までは汪惟父（慶祺）の編輯兼発行であったが、第四号より彼は印刷兼発行者となり、吳趸人が編輯者として出版刊記に名前をつらねることになる。雑誌の発行は順調で、光緒三十二年九月望日（十五日，以降毎月望日発行）に第一号を出して以来、翌年四月に第八号が出るまで月刊として発行期日を遵守していた。ところが、吳趸人編輯の第八号が出るや『月月小説』は停刊してしまうのである。そして、四ヶ月を経た光緒三十三年九月一日に復刊されるが、編輯者は許伏民、印刷兼発行者は沈済宣と改まっており、吳趸人および汪惟父の名前はみあたらなくなってしまう。

その原因は、光緒三十三年三月に汪惟父が病気になったことで、ことに四月一日には危篤状態となり吳趸人、周桂笙の二人も病床に駆けつけている^⑧。おそらく、この病が原因で『月月小説』の経営もうまくいかなくなり、結局は雑誌の経営権を他に譲らなければならなくなっ

吳趼人の歴史小説について（上）

たのではないか、そしてその結果、吳趼人も編集の任を解かれたと推測される。吳趼人が編集を退いたことについては、復刊した『月月小説』第九号の「通信広告」欄に次のような一文が載っていることである。

吳君趼人仍為本社總撰員惟現不住館如有往来信件請逕寄乍浦路多寿里吳宅収

この一文から第九号が発行される以前には、吳趼人は月月小説社に泊り込んで編集に従事していたこと、この号以後は自宅に戻ったことがわかる。更にここには引用はしないが、同じ号に掲げられた「本社広告」に当時の著名な訳述家陳景韓（冷血）と同じく著名な作家包天笑を招請し、第十号より誌面の大改革を行なうと告知されている。これ以後、吳趼人は一執筆者として『月月小説』に作品を発表していくことになる。編輯者の許伏民、発行者の沈済宣や陳景韓たちと吳趼人の間でどのような確執があったのか、あるいはなかったのかはわからない。しかし、『月月小説』の編集の方針は変化した。したがって、その影響を受けて「兩晋演義」も先に掲げたことわり書きとともに中断してしまったと考えられるのである。（以上の点に関しての詳しい経緯については、注③に掲げた拙稿「吳趼人と『月月小説』出版——事項・出版広告の語る『月月小説』」を参照願いたい。）

さて「兩晋演義」は『月月小説』第十号（光緒三十三年十月）で中断したのだが、同誌第十一号（同年十一月）より吳趼人は新たに「雲南野乘」の連載を開始した。『月月小説』第十一号掲載の「雲南野乘」第一回末尾に、次のような「作者附白」があって、以下のように物語の概要と依拠する史料及び史料の元足に苦慮する作者の姿を伝える。

一、此書有慨於雲南死絶会而作、擬取自莊躋開闢滇地、至雲南最近之情形、盡列入書内。

一、此書演義体裁、要旨取材於正史。除史冊外、別取元人董莊愨『威楚日記』・明人楊用修『滇載記』又程原道綏輯『暇錄徭僕類考』・『古滇風俗考』及『国朝馮再来滇考』等書、以為考証。惟苦藏書無多、海内君子有知可以取材之書者、乞有以示我、以匡不逮、曷勝希望。

一、最近之調査、至為切要。海内君子、如有所記載、可有所記載、可資參考者、苟能郵以見示、俾成全璧、幸甚。如欲取酬值者、亦請先行函商、当有以奉報。 著者謹白

上文より吳趼人は戦国時代の楚の莊躋の雲南征服から、「最近」つまり清末までの二千年以上の雲南の歴史をすべて演義体の小説に仕立てようとしたことが解る。この長期間の歴史を吳趼人は数回あるいは十数回で完結させる予定で連載をはじめたのだろうか。到底数回で完結する小説とは思えない。先にも述べたように「兩晋演義」の連載中止の理由は「全体が百回以上に及ぶので毎年一・二回の掲載では読者が飽きてしまふし、もし今まで以上の回数を掲載するとなれば紙幅に限りがあり、他の小説の篇幅を奪ってしまう」ためであった。それ

なのに再びこのような長期間の歴史を演義体小説として『月月小説』に連載し始めたのである。この疑問に対する回答は現在のところ不明と言うより他はない。しかし、結局「雲南野乘」は同誌第十四号（光緒三十四年二月）までに第三回までが掲載されて中断してしまい、その後書き継がれることなく「痛史」「兩晋演義」同様に未完に終わってしまうのであった。

先に「兩晋演義」が未完に終わった理由の一つは、吳趼人『月月小説』の編集を降りたことが関わっていることをあげた。いま一つは、吳趼人の作家としての資質にかかわる。以下この点について考えてみたい。

2. 吳趼人の歴史小説論

さて吳趼人が小説および歴史小説についてどのような考えを抱いたかは、詳しくはわからない。しかし、若干の記述は残っている。それは小説全般に言及した「月月小説序」^⑨、歴史小説について述べた「歴史小説総序」および「『兩晋演義』序」である。ともに『月月小説』第一号に掲載された。以下、順を追ってこれらの「序」の中で言及された歴史小説に関わる部分を見ていくことにする。

まず吳趼人は「月月小説序」の中で、小説のもつ特別な力を二つあげている。その第一は「足以補助記憶力」ということ。たとえば、中国の正史は膨大ですべてを記憶することはできないが、ひとり『三国史』のみは、字を知っているものはみなその内容は知っている。これは正史『三国史』を通読した結果ではなくして、小説『三国演義』を読んだためである。つまり、史書は読んでも興味がなければ忘れてしまうが、小説『三国演義』の物語の面白さは記憶に残る、記憶を補助するからである。第二は「易輸入知識」ということである。人間は日常の見聞より新しい知識を得るが、すぐに忘れてしまうことが多い。しかし、これらの知識を小説の中に織りこんでやれば、小説に興味をもつものは、知らず知らずのうちに頭の中に刻み込まれて忘れないからである。そして、このような小説の功利的有用性を説いた後、現在のような道德淪落の時代にあっては(吳趼人は清末期をそのように認識していた)、そのように人心を感化する小説を用いて人々の心を矯正するのがよい、と述べ、且つ歴史小説執筆の目的について以下のように言及する。

是故吾發大誓願、將遍撰譯鷹史小説以為教科之助。歴史云者、非徒記其事實之謂也、旌善懲惡之意實寓焉。旧史之繁重、讀之不易矣、而新輯教科書、又適嫌其略。吾於是欲持此小説竊分教員一席焉。～善教育者、德育与智育本相輔、不善教育者、德育与智育轉相妨。此無他、譎与正之別而已。吾既欲持此小説以分教員之一席、則不敢不慎審以出之。歴史小説而外、如社会小説、家庭小説及科学、冒險等、或奇言之、或正言之、務使導之以入於道德範圍之内。即艶情小説一種、亦必軌於正道乃入選焉～庶幾借小説之感情、為德育之一助云爾。

呉趺人の歴史小説について（上）

上文を要約すれば、歴史というものは、歴史的事実を記せばよいというものではなく、勸善懲悪の意が寓されていなくてはならない。つまり、人の道としての道徳が意識されていなくてはならない。ゆえに呉趺人が歴史小説を書く目的は、小説の面白さを借りて教育、徳育の一助とするため、その内容は道徳な面を踏み外さない、ということになる。

また、「歴史小説総序」においても上述と同様の見解を述べている。

秦・漢以来，史冊繁重，皮架盈壁，浩如烟海，遑論士子購求匪易，即藏書之家，未必卒業，坐令前賢住行，徒飽蠹腹，古代精華，視等覆瓿。～隠几仮寐，聞窓外喁喁。竊聽之，輿夫二人，対談三国史事也。雖附会無稽者十之五六，而史事略亦得十之三四焉。蹶然起日，道在是矣，此演義之功也。蓋小説家言，興味濃厚，易於引人入勝也。是故等魏・蜀，呉事，而陳寿『三国志』読之者寡，如『三国演義』，則自士夫迄於輿台，蓋靡不手一篇者矣。惜哉！歴代史籍，無演義以為之輔翼也。

以上に見るように、歴史演義小説に功利的な意義を見出した呉趺人は、自らも「三国演義」を継ぐ「両晋演義」の執筆を宣言するのである。

歴史小説之最足動人者、為『三国演義』読至篇終、鮮有不悵然以不知晋以後事為憾者、吾請繼『三国演義』以為『両晋演義』、雖坊間已有『東西晋』之刻、然其書不成片段、不合体裁、～吾請更為之、以『通鑑』為線索、以『晋書』『十六刻春秋』為材料～(『両晋演義』序)

ここで呉趺人は、坊間に既に『東西晋』（普通『東西晋』と呼ばれるものには、明代の作で有る『東西晋演義』および『別本東西晋演義』の二種がある）という、『三国演義』以後の歴史を継いだ演義体小説があるにもかかわらず、それを「段落を成さず」「文章にならぬ」と痛罵し、自分こそが『三国演義』とは、周知のとおり晋の陳寿の『三国史』等に基づいた演義体小説であって、そのストーリーは中国における他のいかなる演義体小説よりも、史実に忠実に描かれているといわれる^⑩。そして、呉趺人にとってはこの史実に忠実な描写ということこそ、重要なことであって、『三国演義』を継ぐべき演義体小説『両晋演義』執筆の意欲をかきたてられた大きな要因となったのである。つまり『両晋演義』を書くにあたり、『通鑑』の記述を筋書とし、『晋書』や『十六国春秋』を材料とする、というのは、『三国演義』が歴代の正史などの史実に忠実に依拠していることを認め、自らもその方法に倣うことを是とし、且つ実践することを宣言したことを示すといえよう。

呉趺人がなぜこのように忠実に依拠しなければならぬことを主張したのか。その原因はといえば、彼は『三国演義』以後、その顰に倣って次々に出版された演義体小説の荒唐無稽にして牽強附会な点を忌み嫌ったからである。

自『三国演義』行世之後、歴史小説、層出不窮。～『三国演義』出而膾炙人口、自士夫以至輿台、莫不人手一篇。人見其風行也、遂競効為之、然每下愈況、動以附会為能、輒使歷史真相隱而不彰、而一般無稽之言、徒乱人耳目、愚昧之人、讀之互相伝述、一若吾古人果有如是種種之怪謬之事也者、嗚呼！自此等書出、而愚人益愚矣。吾嘗默計之、自『春秋列国』以迄『英列伝』『鉄冠図』、除『列国』外、其附会者当居百分之九九。甚至借一古人之姓名、以為一書之主腦姓名之外、無一非附会者、如『征東伝』之写薛仁貴、『万花楼』之写狄青是也。至如『封神榜』之以神怪之談、而借歷史為依附者、更無論矣。～(同前)

吳趼人にとっては歴史演義小説とは、正史に書かれている歴史上の事実の演義、つまり敷衍でなければならないのであって、決して史実に二、三の材料を借りて作者自らの空想や創造を附会してはならないものであった。彼は、そのような附会を旨とした、あるいは荒唐の言を弄した作品は、ただ人々の耳目を混乱させるのみで、歴史の真相を押し隠し、愚昧な人間をいよいよ愚昧にしてしまう悪書であると考えた。彼の歴史演義小説は、かような作品群に対する不満のうえに成り立っていた。従って彼の小説は、空想的描写を排除し、現実的な写實的傾向となる。つまり彼の歴史小説は、小説とはいいいながらもその目指すところは、難解な正史を読み得ない愚昧な人々に正史の史実を忠実に伝達するための、手軽で興味深い歴史教科書としての役割を担うことであった。教科書であるからには史実に忠実でなければならぬし、しかし史実に忠実といっても、それは難解な正史の類と同様であっては、ならない。そこで演義という通俗的な手段を使用して史実に忠実な小説を書くことこそが、愚昧な人間の興味をそそり、彼らを教化し得る最良の方法と考えられたのである。では、吳趼人が考える正史に忠実な歴史小説演義は、自己の作品として果たして成功したのであろうか。『『兩晋演義』序』の末尾の次のような一節がある。

旋得吾益友蔣子紫儕來函、勗我日、撰歴史小説者当以發明正史事實為宗旨、以借古鑑今為誘導、不可過涉虛誕、与正史相刺謬、尤不可張冠季戴、以別朝之事實牽率屏入、貽誤閱者云云。末一語。蓋蔣子以余所撰痛史而發也。余之撰痛史、因別有所感故爾爾、即微蔣子勉言、余且不復為、今而後尤当服膺斯言矣。

この一文は、「痛史」に対する友人蔣紫儕の忠告である。「痛史」のどの部分についての言及かは具体的にはわからないが、「別の時代の事実を強引に取り込んで、読者を誤らせる」箇所が「痛史」にあったことがわかる。それについて吳趼人は「他に考えるところがあってそのようにした」と弁明しているが、結局「痛史」において自らがもっとも忌む「空想や創造を附会して」しまったことになる。しかし、この附会が「痛史」を失敗作にしたのかといえ

ば、それはまるで逆でそのような附会がふんだんにあればこそ、未完に終わったといえ「痛史」は小説的には成功しているのである。たとえば「痛史」の中には、呉趺人が創造した忍者もどきの胡仇（「蒙古を仇とする」の寓意）のような人物が登場し大活躍したり、また後半部以後重要な舞台となる梁山泊にも紛う仙霞嶺に、英雄たちが集まり蒙古への反抗を話し合うなどの描写は、呉趺人の創作なのである。そして、物語の興味は彼らの設定を得てこそ盛り上がるといえる。この点については楊世驥も「裏面的故事頗有与史乘不符者、其長処是能以很大的篇幅去写那些無名英雄們的活躍、這些無名英雄們都是作者所添構出来的、所以非常使人感動」^①と称賛している。つまり、呉趺人は自己の歴史小説は附会を排除し正史に基づくものをと意図したが、結果的には附会なしでは「痛史」の成功はあり得なかったといえる。彼は「他に考えるところがあってそのようにした」と弁明しているが、それは前述のように、呉趺人には「歴史とは歴史的事実を記せばよいというものではなく、勸善懲悪の意が寓されていなくてはならない」との認識があり、蒙古に反抗する胡仇や仙霞嶺の英雄たちの行為を描くことは勸善懲悪を描くことであって、それは附会とはいえないと考えたのかもしれない。頭では正史に忠実にと考えるが、実作には史実に外れる話が交錯し、それが作品を興味横溢する物語に仕上げる、という矛盾。「痛史」が未完に終わったのは、次章でも述べるように宋朝滅亡（つまり善が悪に破れる）という史実の前には、これらの英雄たちの活躍の場もなくなってしまったということと同時に、このような理想と実際の確執もその要因になったと考えられる。そして、これはまた他の二篇の小説が未完に終わったことの原因であるとも類推してよいだろう。

「痛史」は以上に述べた三つの「序」に先んじて執筆された。「兩晋演義」は、これらの「序」と同時に連載が始まった。しかし、呉趺人は『兩晋演義』序において「蔣紫儕の言葉を今後服膺しなければならぬ」と述べたにもかかわらず、「兩晋演義」執筆に際してもまた附会を行ない以下のようにその弁明に努めている。

按此楊皇后乃元后也、其從妹乃悼后。元后卒於泰始十年、此時所叙太康二三年間事。小説家固不妨稍為參差以順筆勢也。（第一回眉注）

作小説難、作歴史小説尤難、作歴史小説而欲不失歴史之真相尤難。作歴史小説不失其真相、而欲其趣味、尤難之難。其叙事或稍有參差先后者、取順筆勢、不得已也。或略加附会、以為点染、亦不得已也。他日当於逐處加以眉批指出之、庶可略借趣味以佐閱者、復指出之、使不為處惑他。（「兩晋演義」第一回評語）

呉趺人の小説の特色は、勸善懲悪的な描写が多く、悪人も善人もその度合いが甚だしい。ことに悪人に対する罵倒的な描写は醜悪極り、誇張に満ちている。魯迅は『中国小説史略』

「第二十八篇 清末之譴責小説」の中で、吳趼人の「二十年目睹之怪現狀」を「惜描写失之張皇、時或傷于溢惡、言違真実、則感人之力量頓微、～」と評したが、その評価は確かに的確といえよう。しかし、「描写失之張皇、時或傷于溢惡、言違真実」という点にこそ、吳趼人の小説の特色があり面白さがあったのであって、それが時人の嗜好に合致し歓迎された大きな要因であることは見逃せない。故に史実に忠実な演義小説などは、吳趼人には書けるはずもなく、書けたとしても、それは「痛史」や「兩晋演義」には遠く及ばなかったであろう。^⑫

註

- ① 吳趼人の作品の全容は、拙稿「我仏山人著作目録」（昭和60.3.30『文藝論叢』24号、大谷大学文芸学会）を、また彼の略歴については同訳編「李葭榮『我仏山人伝』訳注——附吳趼人年譜稿・吳趼人世系表」（昭和58.3.30『文藝論叢』20号、同前）を参照願いたい。
- ② これらの歴史小説のそれぞれの初出掲載状況は、以下の通りである（上海書店影印版『新小説』、『月月小説』による）。

○「痛史」（『新小説』）

- 第一～第三回：第八号〈光緒二十九年八月十五日〉（1903.10.5）
 第四～第六回：第九号〈光緒三十年六月二五日補印〉（1904.8.6）
 第七・八回：第十号〈光緒三十年七月二五日補印〉（1904.9.4）
 第九・十回：第十一号〈光緒三十年九月十五日補印〉（1904.10.23）
 第十一・十二回：第十二号〈光緒三十年十月廿五日補印〉（1904.12.1）
 第十三・十四回：第十三号〈光緒三十一年元月〉（1905）
 第十五回：第十七号〈光緒三十一年元月〉（1905）
 第十六回：第十八号〈刊年不記〉
 第十七回～第十九回：第二十号〈刊年不記〉
 第二十・二十一回：第二十一号〈刊年不記〉
 第二十二・二十三回：第二十号〈刊年不記〉
 第二十四回・二十五回：第二十三号〈刊年不記〉
 第二十六回・二十七回：第二十四号〈刊年不記〉

上記、元号発行年の後の「補印」とは初版が出たあとの追加印刷したという意味かもしれないが、よくわからない。また「刊年不記」とは掲載雑誌そのものに刊年が記されていないこと。上海人民出版社『中国近代期刊篇目彙録・第二卷上』（1970.10）には、『新小説』全冊の発行年月日が明記されているが、真偽のほどは不明（樽本照雄「『新小説』の発行年月と印刷地」〈1982.2.14『中国文芸研究会会報』32号、中国文芸研究会参照）。

○「兩晋演義」（『月月小説』）

- 第一・二回：第一号〈光緒三十二年九月望日〉（1906.11.1）
 第三～五回：第二号〈光緒三十二年十月望日〉（1906.11.30）
 第六～七回：第三号〈光緒三十二年十一月望日〉（1906.12.30）
 第十～十二回：第四号〈光緒三十二年十二月望日〉（1907.1.28）
 第十三～十五回：第五号〈光緒三十三年正月望日〉（1907.2.27）

吳趼人の歴史小説について（上）

第十六～十八回：第六号〈光緒三十三年二月望日〉（1907. 3 .28）

第十九・二十回：第七号〈光緒三十三年三月望日〉（1907. 4 .27）

第二十一回：第八号〈光緒三十三年四月望日〉（1907. 5 .26）

第二十二回：第九号〈光緒三十三年九月初一日〉（1907.10. 7）

第二十三回：第十号〈光緒三十三年丁未十月〉（1907）

○「雲南野乘」（『月月小説』）

第一回：第十一号〈光緒三十三年丁未年十一月〉（1907）

第二回：第十二号〈光緒三十三年丁未年十二月〉（1907）

第三回：第十四号〈光緒三十四年戊申年二月〉（1908）

③ 吳趼人と『月月小説』の関係については、拙稿「吳趼人と『月月小説』——出版事項・出版広告の語る『月月小説』」（1985. 3. 10『呻啞』20号、呻啞之会）参照。尚、『月月小説』第二号封面四に掲載された「本社緊要広告」に汪惟父が吳趼人たちを総撰述等に招請した経緯が次のように記されている。

啓者、本社所聘総撰述南海吳研人先生、総訳述上海周桂笙先生、皆現今小説界繙訳界中、上上人物、文名藉甚、卓然巨子曩者日本横浜新小説報中所刊名著大半皆出二君之手、閱者莫不歡迎、茲横浜新小説業已停刊、凡愛読佳小説者聞之、当亦為之悵悵然不樂也、繼起而重振之此其責舍、本社同人其誰与婦爰、商之二君自三号以後、当逐漸增多自撰自訳之稿以厭 閱者諸君之雅望幸乞留意焉

月月小説社総經理慶祺謹告

尚、この一文も上海書店・龍溪書舎の影印版では落脱している。

④魏紹昌編『吳趼人研究資料』（1980.4上海古籍出版社）および『我佛山人文集第一卷』（1988.8花城出版社）盧叔度「前言」など参照。

⑤「奇情小説 情變」は『輿論時事報』宣統二年五月十六日から同年九月まで連載され、同年九月十九日の吳趼人の死によって杜絶。楔子一回。正文は十回の予定であったようだが、八回余を掲載して未完に終わった。「糊塗世界」「最近社会齷齪史」はともに初出雑誌未見のため、はたして完結したか否かは不明であるが、近年、花城出版から出版された「我佛山人文集」所収の情況からすれば未完に終わったものと思われる。

⑥楊世驥「痛史」（民国34.4初版、同35.8再版、中華書局『文苑談往』収、後、中華民國67.2台湾・華世出版社より増補版出版）

⑦この記事は、上海書店の影印版『月月小説』および龍溪書舎の影印版ではともに削除されている。この二種の影印版は本文以外に印刷されている広告や記事の類がほとんど削除されており、完全な影印版ではない。いま京都大学人文科学研究所東洋学文献センター所蔵の原本『月月小説』による。尚、該センターには第十二号までが所蔵されている。

⑧『月月小説』第八号〈光緒三十三年四月望日〉（1907.5.26）末の広告欄に汪惟父の手になる「感徳鳴謝」という一文があって、病気の経緯が記されている。

⑨「月月小説序」は無署名であるが、その記述から察して吳趼人の手になることは、定説となっている。

⑩本田濟「三国演義と三国志」（1965年平凡社『中国の八大小説』収）に「中国の小説には、史実に材料を採ったものが多い。～しかし、『三国演義』ほど忠実に、歴史に依拠した小説は、他に例があるまい。～（三国）『演義』が『三国志』や范曄の『後漢書』、『資治通鑑』によりかかっている程度は、単に史実の点だけではない。対話の文までほとんどそのままである」とある。

⑪楊世驥「痛史」注③に同じ。

⑫本稿「第二章」は拙稿「吳趼人の歴史小説『痛史』覚え書き」（昭和53.4.「千里山文学論集」19）の記述と部分的に重複する。しかし、本稿に見るように、現在では吳趼人の歴史小説について観点が変わったことを付

記する次第である。

付記：元号使用の場合は月日も旧暦で記してある。

★本稿は、1990年度聖徳学園岐阜教育大学研究助成金による共同研究の成果である。